

現代アートと地域活性化

～クリエイティブシティ別府の可能性～

2010年9月

 **DBJ** 株式会社日本政策投資銀行

大分事務所

はじめに

現在、多くの地方都市は、人口減少や少子・高齢化、過疎化等の問題を抱えており、そしてこれらに起因する社会・人口構造の変化や郊外型大規模ショッピングセンターの台頭等により、中心市街地の空洞化が加速するなど地域の活力が減退している。

国も中心市街地活性化のための助成など対策を講じて支援しているところであるが、地域の活力を再び取り戻すため、地域の特性や環境にマッチしたさまざまな方策により地域再生、地域活性化をめざす積極的な取り組みが全国各地の都市で展開されている。

そうしたなか、現代アートが地域活性化のシーズとして着目されるようになった。ヨーロッパでは 1980 年代より産業構造の転換をきっかけに多くの都市で芸術文化の持つ創造性に注目し、芸術文化と各都市の既存資源を組み合わせた都市再生戦略が組まれるようになり、バルセロナやボローニャのように芸術文化のまちとしての地位を確立した都市も多い。そして、わが国でも横浜市や金沢市等が、芸術文化による都市再生を標榜する「クリエイティブシティ（創造都市）」としての構想をいち早く掲げ、都市戦略を策定・実践し、地域活性化に向けた積極的な取り組みを進めている。

温泉観光地で知られる大分県別府市においても、温泉文化を核に「別府八湯温泉泊覧会（通称：オンパク）」等の体験型文化イベントや、世界的に有名なピアニストマルタ・アルゲリッチ氏を総監督に迎えての「別府アルゲリッチ音楽祭」など芸術文化が持つ創造性を活かした地域活性化の取り組みを、民間が中心となり継続・実践してきた。これらに加えて昨年、別府のまちを舞台にした『別府現代芸術フェスティバル 2009「混浴温泉世界」』が開催され、その後も定期的に現代アートのイベントを開催するなど芸術文化に関わるさまざまな取り組みが進められているところである。こうした点が評価され、別府市は、文化庁から 2009 年度「文化芸術創造都市」として表彰を受けるに至った。

本レポートは、温泉という魅力的な地域資源を持つ観光地・別府が、芸術文化、とりわけ現代アートの創造性を活かし、それを既存の地域資源と融合させることで元来持っていたまちの魅力を引き出すとともに、新たな魅力を相乗的に生み出し、地域の活性化につなげていけるか否か——言葉を変えれば、「クリエイティブシティ別府の可能性」について考察したものである。

目 次

【第1章】 別府市の現状と課題	P. 3～6
【第2章】 現代アートによる地域活性化の主な事例	P. 7～14
【第3章】 別府市の地域活性化への取り組み	P. 15～17
【第4章】 現代アートと別府市	P. 18～21
【第5章】 クリエイティブシティ別府に向けて	P. 22～26

【第1章】別府市の現状と課題

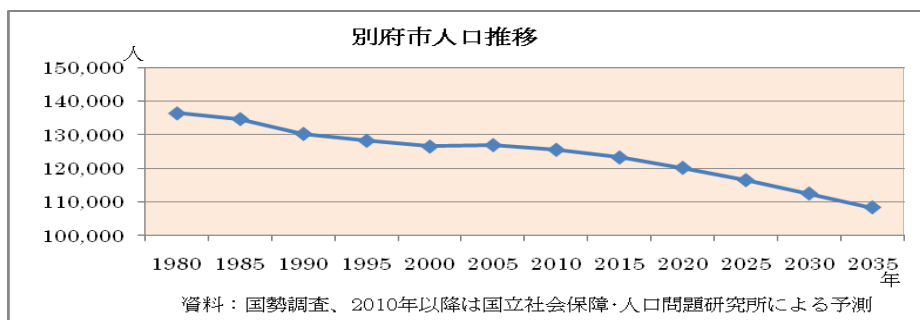
(1) 別府市概観

別府が温泉湧出量日本一を誇る日本でも有数の温泉観光地であり、観光を主要産業とすることは言うまでもなからう。鶴見岳から別府湾に流れ込む扇状型の地形の随所から湯煙の柱が立ちあがり、独特の雰囲気醸し出す。大きく8つのエリアに分けられる市内の温泉は別府八湯と呼ばれ、それぞれに特性を持ち、また泉質も世界にある泉質11種類のうち10種類を有するなど豊富でバラエティに富むことから観光客にとって大きな魅力となっている。また、地元住民にとって温泉は日常生活の一部であり、住民は我が家の風呂より近隣の共同温泉に行くことの方が多く、タオルと洗面道具を入れた洗面器を片手に歩く住民の姿がまちのあちこちで見られる。ほとんどの施設が100円以下で入浴できる共同温泉は市内に100カ所を超え、そこは住民の暮らしの場であると同時に、社交場ともなっている。

市内中心部は、高架の別府駅から東に向かうと、緩やかに下る駅前道路が500m程で国道10号と交差し、その先に海岸沿いの温泉ホテル・旅館エリア、そして穏やかな別府湾が眼前に広がる。駅周辺には昔ながらの小さな商店街が複数あるが、メインは駅前道路から直角に南に向かって平行に走る2本のアーケードであり、生活雑貨や日用品、土産物を揃えた店舗等が並んでいる。別府は第二次世界大戦の戦火を逃れたことで古いまちなみや通りが残っており、そのアーケード周辺は細い路地が縦横無尽に雑然と入り組み、飲食店等が密集する混沌とした独特の雰囲気を放つ歓楽街となっている。また、別府駅から北側はマンションが並ぶ居住エリアとなっており、緑豊かな別府公園、国際コンベンションセンター「ビーコンプラザ」、別府公民館や別府市役所等の文化施設、公共施設が集まる。

(2) 別府市人口の将来推移

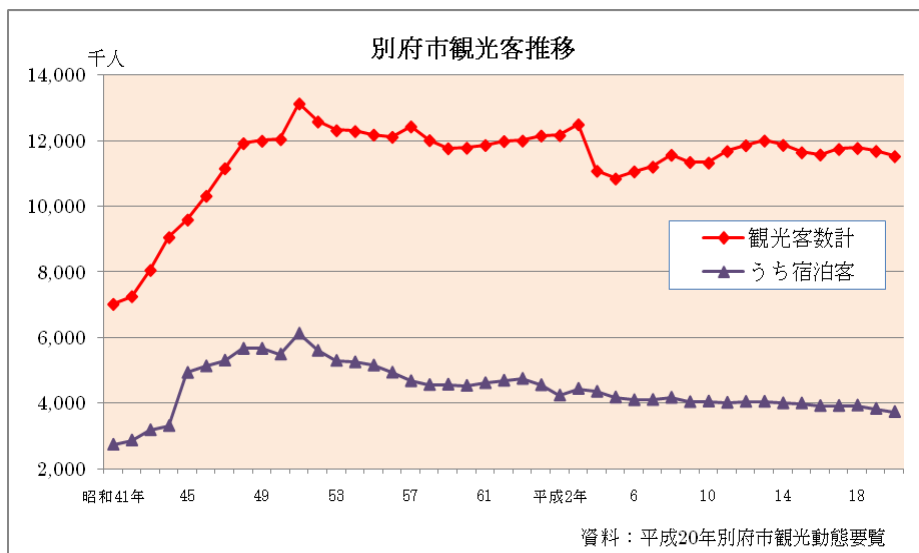
温泉を中心とした観光産業で栄えてきた別府は、その隆盛とともに人口も増加していったが、1980年をピークに人口が減少局面に入り、将来的にもこの傾向が続くことが予想されている。



また、人口減少と同時に高齢化も進む。国立社会保障・人口問題研究所によれば、2005年時点で32千人であった老年人口（65歳以上）は2035年においても33千人と5%増に留まるが、年少人口（0～14歳）が29%減（15→11千人）、生産年齢人口（15～64歳）が20%減（80→64千人）と急減するため、市人口に占める老年人口の比率は、25%から31%まで上昇すると推計されている。

（3）別府観光と中心市街地の動向

別府市の主要産業である観光についてみると、昭和40年代には新婚旅行のメッカとなり、昭和50年代までは社員旅行や修学旅行等で訪れる団体宿泊型の観光客を多く招き入れ観光産業は隆盛を極めたが、旅行形態の変化から宿泊客は減少の一途をたどっている。日帰り観光客を含めた全体推移では一時の落ち込みからは回復しているものの、依然低迷した状況にあるといえる。



全国的に社会・組織の変化や「個」を尊重する時流から、社員旅行等の団体旅行は減少している。かといって、国内の温泉観光地が一律に衰退しているわけではない。人々のライフスタイルが多様化し、温泉観光地にそれぞれが自分の嗜好にあった楽しみ方を求めるようになったのだといえる。

例えば、温泉観光地として全国的にも知名度の高い由布院は、社会の喧噪から離れた静かな田舎のゆったりとした時間と空間のなかでホスピタリティやリラクゼーションを提供するといったコンセプトが、複雑化した社会や日常のストレスから開放され、「安らぎ」や「癒し」を満喫するという付加価値を求める温泉観光客のニーズにマッチした結果、温泉観光地ランキングで上位常連になるほどの人気を得ている。

その一方、別府は、温泉観光地として由布院に匹敵、あるいはそれを上回る知名度がありながら宿泊観光客の低迷が続いている。その要因としては、団体宿泊客を中心とした旧来型の温泉観光に対応した産業構造のため、増加している個人観光客のニーズや嗜好を十分にカバーできていない可能性があることや、別府観光に対する団体旅行のイメージが観光客側にも強いことなどが挙げられる。

別府の中心市街地は、以前は多くの観光客が宿泊施設の浴衣姿でまちをそぞろ歩き、また生活の中心として訪れる住民の往来で賑わいをみせていたが、これら観光客や人口の減少等により、駅前アーケード等に空き店舗が目立つようになっている。

中心市街地の歩行者通行量（10～17時の7時間）は、1978年には30千人であったが、1989年22千人、2009年11千人と減少傾向にある。この結果、2006年度時点で、中心市街地の店舗416店のうち開業店舗は291店に留まる（空き店舗率30%）。店舗以外に駐車場、住宅等に利用されている土地を含む総間口数556件に占める開業店舗の割合は52%に過ぎない（別府市中心市街地活性化基本計画）。

中心市街地の活性化は、温泉観光都市としての別府再興のキーポイントでもある。別府への来訪者が「温泉は良かったがまちは廃れていて寂しかった」というマイナスイメージを抱かぬよう、豊富な温泉に加えてプラスαの付加価値を中心市街地に求めたい。

（４）地域活性化に向けたヒント

別府の中心市街地活性化を図るうえでは、「交流人口（観光客）の減少→中心市街地のマーケット縮小→定住人口の減少→にぎわい消失による中心市街地の魅力低下→交流人口のさらなる減少」という負のスパイラルに歯止めをかける必要がある。そのためには、新しい世代の観光客を取り込む（需要面）とともに、彼らをもてなす集客交流産業の担い手を育成・誘致（供給面）していくうえで、既存の地域資源を活かしつつも、若い世代を惹きつけるまちづくりが求められよう。

既に別府市では、既存資源である温泉とそこから生まれた文化やまちなみを新たな切り口で活かすため、現代アートを核とした取り組みが始まっている。

なぜ、現代アートなのであろうか。

その点を説明するうえで、「クリエイティブシティ（創造都市）」という概念に着目したい。大阪市立大学の佐々木雅幸教授によれば「創造都市とは人間の創造活動の自由な発揮に基づいて、文化と産業における創造性に富み、同時に、脱大量生産の革新的で柔軟な都市経済システムを備えた都市」であるという（佐々木雅幸著『創造都市への挑戦』）。欧州で「クリエイティブシティ」と呼ばれる都市の中には、ニューキャッスル&ゲーツヘッド（イギリス）、ナント（フランス）、ビルバオ（スペイン）、エッセン（ドイツ）のように、従来の基幹産業が衰退し都市の活力が低下する中で、現代アートやデザインの創造性を活用して都市再生を図った事例が多い。

例えば、英国北東部の双子都市、ニューキャッスル&ゲーツヘッドの基幹産業は

造船と鉄鋼であったが、これらの産業の衰退とともにまちも活力を失っていった。こうした中、ゲーツヘッドでは都市再生のため、パブリック・アートの大胆な活用を決め、彫刻家A・ゴームリーによる巨大彫刻「エンジェル・オブ・ザ・ノース」（高さ 20m、横 54m）を丘陵部に設置した。当初は反対意見も寄せられたが、国内外で評判を集めた結果、現在では市民の誇りとなったという。この彫刻の建設に際して、地場産業であった造船技術が活かされたことは一つのポイントといえよう。さらに、既存工場を美術館に転用した施設も整備された。当地において現代アートは、産業遺産である造船技術や鉄鋼等の材料を活用して制作されたため、作品はそこに存在する都市の歴史や産業等の資源と融け合い、都市のアイデンティティを失うことなく、地域資源に再び光をあてて蘇らせ、2005年には200万人の観光客が訪れるほどの新たな魅力を創出したのである。

このように現代アートは、都市の歴史文化や産業など地域資源の全てを包括し、かつ活かしたまま、新たな魅力を生み出すことができる創造性、可能性を持っているといえよう。

製造業の衰退から都市再生を果たした欧州の創造都市と異なり、別府の基幹産業は温泉観光であるという違いはある。しかし、製造業から集客交流産業への転換に際して前者が払った労苦を思えば、もともと集客交流都市であった別府にとって、クリエイティブシティへの転換は比較的容易ともいえるのではなかろうか。

現代アートによるまちづくりは、国内外で、その地域性に対応したかたちでさまざまな取り組みがなされている。現代アートや文化を核に、それらの持つ創造性とその地域の産業構造等との共鳴により新たなまちの魅力を創出し、地域の活性化を図っている国内各地の主な取り組み事例を次章でいくつか紹介する。

【第2章】現代アートによる地域活性化の主な事例

(1) 横浜市

人口約 360 万人の大都市である横浜は港町としての長い歴史を持ち、2009 年に開港 150 周年を迎えた。港の歴史とともに周辺には歴史的建造物や風景など多くの資源・場所が集積し、東京とはまた異質の独特の都市景観を生み出し、多くの観光客を惹き付けてきた。これら歴史的建造物や港周辺の風景等の資源を、文化や芸術が持つ創造性により都市の新たな魅力創出とサステナブルな発展につなげるべく、横浜市は 2004 年に「文化芸術都市創造事業本部（現 A P E C ・創造都市事業本部）」を設置、文化芸術の持つ創造性によるまちづくりを都市戦略として策定、行政の強いリーダーシップのもとで「文化芸術創造都市クリエイティブシティ・ヨコハマ」を標榜し、以下の目標を掲げている。

- ① アーティストのまちへの移住促進やまた活動を展開するために必要な拠点整備等によりアーティスト・クリエイターが住みたくなる創造環境の実現
- ② 映画・映像・音楽・コンピュータソフト等のいわゆる「創造的産業」と呼ばれる分野における産業クラスターの形成等による経済活性化
- ③ ウォーターフロントの整備とともに、都心部に立地する近代建築の映像文化施設等としての利用など魅力ある地域資源の活用
- ④ 市民が主導する文化芸術創造都市づくり

これらの目標を実現するため、ハード面では臨海部の整備や、企業等との協働により歴史的建造物・倉庫等をリノベートして、「ヨコハマ・クリエイティブシティ・センター」や「BankART1929」など文化芸術施設を整備し、アーティストに作品制作活動・発表の場を提供している。ソフト面では東京藝術大学大学院映像研究科等の誘致や、若手アーティスト育成のための事業を実施するなど、行政と企業、NPO等の団体が連携しながら様々なプロジェクトを展開している。

また、国際現代美術展「横浜トリエンナーレ」の開催等により市民等が文化芸術を身近に感じることのできる環境づくりも併せて進めている。



ヨコハマ・クリエイティブシティ・センター
*創造都市ヨコハマの拠点施設

横浜のケースでは、首都圏という土地柄人材が豊富であること、企業等の様々な面でのバックアップが見込まれること、そして行政の強いリーダーシップのもとで芸術文化による都市再生計画が実行されていることが特徴といえる。



BankART1929

*上階はアーティストの作品制作活動の場となっている。

(2) 金沢市

人口約 45 万人の金沢市は加賀藩前田家によって 400 年以上前に確立され、第二次世界大戦の戦禍に遭わなかったことで、現在でも当時からのまちなみが残る。金沢市は昭和 43 年に全国の自治体に先駆け「金沢市伝統環境保存条例」を制定するなど、独自にこれら歴史文化遺産の保存・整備や景観保全に取り組んできた。またこれらの環境を守る取り組みは、伝統工芸の継承や歴史性に富んださまざまな産業発展とも相互に関連しており、金沢の歴史的なまちなみと伝統工芸、創造性・独自性にあふれた産業群は、このまちのアイデンティティを形成しているといえる。

そして創造都市として文化創造施設の整備も進んでおり、1996 年に産業遺産である旧紡績工場の倉庫を改造した「金沢市民芸術村」をオープン、市民の芸術創造活動の場として 24 時間利用可能で多用途の施設となっており、敷地内には金沢伝統工芸の技術継承や人材育成等を目的とした「金沢職人大学校」も併設されている。



また 2004 年には、中心部にあった学校が移転した跡地に「金沢 21 世紀美術館」をオープンした。当美術館は、現代アート美術館であると同時に学生の作品発表のための場や将来を担う小学生への芸術文化教育活動の場ともなっており、文化創造の中心拠点として機能している。

また、現代アートによる新たな文化の創出だけでなく、多くの人が気軽に立ち寄れる「まちの広場」的空間をも目指しており、実際、施設は明るく開放的で心地良い空間であり、外庭では子供達が実際に作品に触れて遊んでいたり、企画展が行われる施設内の展覧会ゾーンだけでなく、誰もが気軽に入れるライブラリー、カフェ等を含む交流ゾーンにも多くの家族連れの姿が見られた。当美術館は、オープン 1 年で当初予想を遙かに上回る約 150 万人の県内外からの来場者を迎えており、大きな経済波及効果をもたらしている。

そして 2009 年には、伝統工芸の技術を生かし現在の産業へつなげる取り組みや伝統工芸に対する関心を高めるための金沢市のさまざまな支援体制等が評価され、「ユネスコ創造都市ネットワーク」の「クラフト&フォークアート分野」において我が国で初めて登録が認定された。

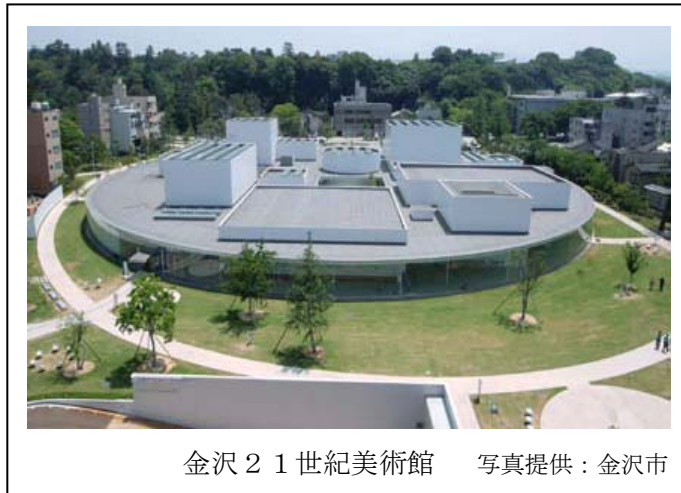
金沢市における創造都市への取り組みを概観すると、1997 年に金沢経済同友会が「金沢都市文化会議（金沢ラウンド）」を提唱、それ以降「金沢創造都市会議」として自治体や学識経験者を含めたメンバーで会議を開催し、金沢市の魅力創出のためのプランが多角的に議論されてきた。そうしたなか、2007 年の会議において、2014 年度の北陸新幹線の金沢開業による都市へのストロー化現象等への危機感から、よ

り魅力的なまちづくりの方策が検討され、そのなかでユネスコのネットワークへの登録が提唱された。これに呼応し金沢市が、具体的な登録申請作業を遂行するため行政と工芸団体、経済団体、市民団体等で組織される「金沢創造都市推進委員会」を立ち上げ、登録申請を行い認定に至ったのである。

以降、創造都市ネットワークに登録されている世界各都市とのネットワーク構築や、「手仕事のまち・金沢」を世界へ発信するため各種事業に取り組んでいるほか、金沢創造都市推進プログラムの策定により、伝統文化の持つ創造性と産業との連携等の観点から創造性あふれるまちづくりを推進している。また、経済同友会が立ち上げた金沢創造都市会議は、現在も旗振り役として、金沢市の魅力創出のための活動を展開している。

このように金沢市の場合、創造都市としての歩みには冒頭に述べたような過去から脈々と続く文化・伝統の継承・発展への地道な取り組みが根底にあるといえるが、現在の活発な活動の背景には、金沢経済同友会が自発的に行動する経済団体として提言するだけでなく地域活性化のために様々な活動を展開し、金沢市の都市戦略に能動的に参画している影響が大きい。

金沢市のまちづくりを牽引している経済界と、以前より積極的にまちづくりに取り組む自治体がともに歩調を合わせ、現在も創造都市のまちづくりを推進しているといえる。



横浜市や金沢市は人口規模的にも政令指定都市や中核市であり、ヨーロッパでも創造都市として名の知れた地域といえ、バルセロナやボローニャなど、やはりこのような都市規模のところが多い。それぞれの都市の努力は言うまでもないが、こうした規模の都市では人材面、経済面、文化施設等の創造的インフラの整備等の点において地方の中小都市より優位性があるといえる。

しかし、大都市に比べて厳しい環境にありながら、それを地域の特性として活かしつつ現代アートによる地域活性化に取り組む地域は、全国各地にある。

以下では、そうした地域の事例として、新潟県の越後妻有、香川県の直島のケースを紹介したい。

(3) 越後妻有地域 (大地の芸術祭)

新潟県の妻有地域は、新潟県の南部に位置する十日町市、津南町の2市町を総称する面積約760k㎡、人口約72千人の中山間地域である。

200箇所とも言われる山間部の集落は少子高齢化・過疎化が進み、地場産業が低迷するなか、広域連携と地域活性化を目指し1994年、新潟県は独自施策として「ニューにいがた里創プラン事業」をスタート、妻有地域は新潟県からの奨励を受け「越後妻有アートネックレス整備事業」を進めることとなった。

当事業は、①妻有の魅力を再発見するための「すてき発見事業」、②住民参加により広域を花でつなぎ、まちのイメージアップを図る「花の道事業」、③アーティストにより各地域にそれぞれの特性を活かしたコミュニティ拠点を整備する「ステージづくり」、そして最後にメインとなる④「大地の芸術祭・越後妻有アートトリエンナーレ」の開催を4つの事業の柱として掲げた。

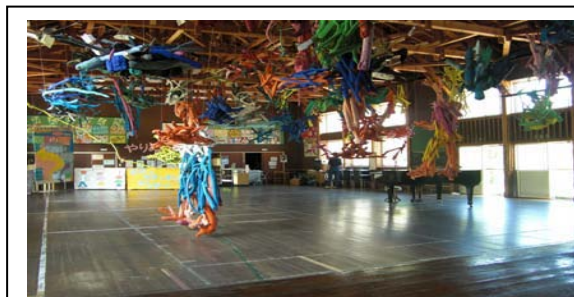


ステージづくり事業「まつだい農舞台」

この「大地の芸術祭」は、現代アートを媒介にした広域連携による地域づくり、すなわち、各市町のエリアの魅力を現代アートの創造性により引き出し、それぞれの独自性を活かすと同時に統一性のある地域イメージを構築し、かつ現代アートによりこれら各エリアを有機的につなげて地域の魅力を広くアピールし、地域活性化を目指すことを目的とした現代アートフェスティバルである。

2000年の第1回以降、3年毎に開催され、昨年開催された第4回では世界32カ国からアーティスト148組が参加、妻有の自然景観をキャンバスとして活用するという壮大さや作品の質などの面で高い評価を受け、今や国際的な現代アートフェスティバルに成長している。

妻有のシンボルともいえる棚田や田畑等の自然景観自体がアート作品となり、また、空き家や商店街などさまざまな場所をインスタレーション¹としてアートと融合させることで、エリア内に365点の作品が展示された。



田島征三 作品「絵本と木の実の美術館」

* 廃校を活用した作品

¹ インスタレーション：室内や屋外にオブジェ等を並べるなどして、その場所や空間全体を作品として鑑賞者に体感させるアート

鑑賞者は作品から作品へと巡る間に、妻有地域の豊かな自然や地域資源を自ずと体感することになり、また、鑑賞者が多数訪れることで住民の地域に対する誇りや愛着心が醸成されるなどの意識変化が起こるといふ相乗効果が生まれている。

これらの作品のうち約 150 点は通年の常設展示であり、また、トリエンナーレ以外でもアート拠点施設ではワークショップが開かれ、妻有の主要産業である「農」や豊かな「食」を組み合わせた各種体験プログラムが組まれるなど、さらなる地域資源とのコラボレーションを生んでいる。

さらに中魚沼郡津南町の一部集落では、トリエンナーレの参加アーティストとの作品協働制作により過疎集落に活力が生まれたことで、持続的な地域活性化につなげようと「北東アジア芸術村」として独自にアーティスト・イン・レジデンス²を開始するなど、新たな取り組みへと波及が続いている。

こうした現代アートによる過疎地の再生は、今後ますます人口減少、少子高齢化が進むなかで、地域の魅力の再発見、創造的人材との交流という観点で注目すべき試みといえよう。

妻有地域の場合、「越後妻有アートネックレス整備事業」という地域活性化のための県の公共事業から始まり、その柱の一つである「大地の芸術祭・越後妻有アートトリエンナーレ」が立ち上げから約 10 年でこれほど大きなイベントとなったのは、アート関係者や地域住民、企業・団体等のつなぎ的役目を負い、当イベントを通じた地域活性化の施策に取り組む十日町市等の積極的な姿勢だけでなく、その地域資源やまたその地域の魅力を引き出す媒介としての現代アートの重要性や必要性を理解・提唱し、そして世界中のアーティストを妻有に呼び寄せるネットワークを持つ強力なプロデューサー 北川フラム氏の存在も大きかったのではないかといえる。

そしてそれらに、地域資源である広大な里山の大地、そこに暮らす人々、アート関係者、当地だけでなく首都圏の学生を中心とする「こへび隊」と呼ばれる多くのボランティアの協働が現代アートにより結びついた結果といえよう。



行武治美 作品「再構築」

* 静かな里山の山中に自然と溶け込んだ作品

² アーティスト・イン・レジデンス：芸術家を招聘して一定期間滞在させ、その土地で作品制作を行ってもらう事業

(4) 直島（直島アートプロジェクト）

高松市の北方約 13km、岡山県玉野市から南方約 3km の瀬戸内海に浮かぶ面積約 14 k m²の離島、直島。㈱三菱マテリアルと水産業の町として発展してきたが、人口は現在約 3,300 人と減少が続き高齢化・過疎化が進んでいる。

1987 年、当時の町長三宅親連氏と株式会社ベネッセコーポレーションの創業者福武哲彦氏との対談を契機に、直島での文化的施設整備プロジェクト「ベネッセアートサイト直島」の動きが始まり、福武哲彦氏の逝去に伴い遺志を継いだ福武總一郎氏が 1989 年に直島国際キャンプ場を、その 3 年後に安藤忠雄氏設計によるホテル兼美術館「ベネッセハウス」をオープン、その後も直島の自然や地域固有の文化の中に現代芸術の持つ創造性を発揮・融合させるプロジェクトが進み、アーティストが選定した島内の各地にその場所に合った作品の制作、恒久展示がなされている。フェリーで直島に到着したその場所から、アート作品が点在し、「直島＝現代アートの島」という鮮烈な印象を与え、島内の本村地区では使用されていない古民家等を活用した「家プロジェクト」により、建物内に有機的にアートをインスタレーションしたり、また建物そのものがアート作品になっているなど、集落内にも創造的空間が随所に見られる。集落の住民もアーティストの制作活動に協力したことで現代アートに対する先入観が取り除かれ、地域活性化の手段として現代アートを歓迎的に受け入れている。

これらベネッセのプロジェクト以外にも、財団法人直島福武美術館財団が運営する安藤忠雄氏設計の地中美術館など、直島の自然景観に溶け込んだ現代アート拠点があり、来島者はアートとともに直島の自然や生活を感じることができる。

そして現在、直島への来島者は年間 30 万人を越えている。

直島の場合、ベネッセという強力なスポンサーの存在が大きい。福武氏の強いリーダーシップのもと、島の歴史や豊かな自然のなかに現代アートの創造性を吹き込むことによって島を活性化させる。それをハード・ソフトの両面で着々と推し進めているといえる。

今年に入り、また新たに安藤忠雄氏設計の李禹煥美術館がオープン、また直島だけでなく周辺の離島、豊島や犬島等での現代アートプロジェクトも進行し、周辺諸島を含めた現代アートによる島の活性化の更なる展開が期待される。

そして 7 月より、世界的なアーティストが数多く参加するアートフェスティバル「瀬戸内国際芸術祭 2010」が開催されている。この芸術祭は、北川フラム氏を総合ディレクターに迎え、香川県など地域の全面協力のもと、直島をはじめとする 7 つの離島と、高松ウォーターフロント・エリアを舞台に展開している。その運営にあたっては、「こえび隊」と名づけられたボランティアがサポートを行っている。

瀬戸内の小さな島は、今や世界的にも名の知られる現代アートの島となりつつある。

(5) 先進事例の整理

以上に紹介した事例から浮かびあがる共通点は、①地域関係者の参加・協働、②外部人材や資源の活用・交流、③地域資源の新たな視点からの活用 の3点といえよう。以下に、これらの視点を切り口として見た、各事例の概要を整理した。

	地域関係者の参加・協働	外部人材や資源の活用・交流	地域資源の新たな視点からの活用
横浜市	<ul style="list-style-type: none"> 行政のリーダーシップ（文化芸術創造都市）と、それに呼応したNPO（BankART1929等）、企業（ビル・倉庫オーナー、創造都市横浜推進協議会等）の参加 	<ul style="list-style-type: none"> 東京藝術大学大学院映像研究科等の誘致 イベント開催、アーティスト・イン・レジデンス事業等を通じた内外アーティストの活用・交流 	<ul style="list-style-type: none"> 歴史的建築物（銀行、財務局等）、倉庫、公共施設を芸術文化拠点にコンバージョン（用途転換）
金沢市	<ul style="list-style-type: none"> 金沢経済同友会の金沢市都市戦略への積極的な参画と、金沢市における芸術文化インフラ（市民芸術村、21世紀美術館）整備、創造都市関連施策のコンビネーション 	<ul style="list-style-type: none"> 創造都市ネットワークへの参加など、内外の創造都市とのネットワークづくり 	<ul style="list-style-type: none"> 伝統産業の高度化・高付加価値化 旧紡績工場倉庫を市民芸術村にコンバージョン
越後妻有地	<ul style="list-style-type: none"> 県の公共事業（越後妻有アートネックレス整備事業）として開始、当初は地元の反発・無関心にさらされたが、住民理解が深まる中、アーティスト・住民協働の作品制作も進展 	<ul style="list-style-type: none"> ディレクターとしての北川フラム氏の存在 内外アーティストの参加 首都圏の学生主体のボランティア「こへび隊」の活動 	<ul style="list-style-type: none"> 妻有地域のシンボリック棚田や田畑等の自然景観や空き家等を活用した現代アート作品の制作・展示
直島	<ul style="list-style-type: none"> ベネッセが、直島町の協力を得てアート・プロジェクトを展開 瀬戸内国際芸術祭では、香川県等の全面協力のもと、7つの離島と高松ウォーターフロントを舞台に開催 	<ul style="list-style-type: none"> 内外アーティストの参加 瀬戸内国際芸術祭では、北川フラム氏がディレクターとして参画 「こへび隊」として組織化されたボランティアの活動 	<ul style="list-style-type: none"> 島の自然や生活空間と現代アートの融合（地中美術館、家プロジェクト等）

【第3章】別府市の地域活性化への取り組み

別府市のまちづくりにとって重要なポイントとなるのが、さまざまな民間団体の活動である。地域住民等が中心となり多様な地域資源に着目、地域を見直し、それを核に地域活性化に向けた活動を展開している。

(1) 別府八湯路地裏散歩 (主催団体：別府八湯竹瓦倶楽部)

別府八湯路地裏散歩は、市民主体によるまちづくりの先駆けとなった活動である。1998年、歴史的建造物でもあるまちのシンボル「竹瓦温泉」の建て替えに危機感を持った住民の有志やホテル・旅館・飲食店等の経営者が集まり、別府の歴史やまちなかの魅力を知り住民同士で共有することで、歴史や温泉を守り、地域の活性化を図るべく、竹瓦地区でスタート。そのため当初は地域住民を対象にしたツアーであったが、これが話題を呼び、地域住民以外の参加者が増加した。

現在は竹瓦地区にとどまらず、市内各エリアで地域に精通した地元のボランティアガイドによるまち歩きツアーが行われており、住民主体の地域活性化活動の象徴ともなっている。

また、住民にとってもわがまちの魅力再発見につながったことで、例えばマイナスの印象として受け取られることが多かった路地裏の猥雑な雰囲気や環境を、地域資源としてポジティブに捉えられるようになるなど意識変化が生まれ、地域活性化に向けた住民の一体感の醸成にもつながったといえる。

(2) 別府八湯温泉泊覧会 (主催団体：NPO法人ハットウ・オンパク)

別府八湯温泉泊覧会(通称：オンパク)は、地域住民が主体となり、地域活性化活動の一環として2001年より別府で始まった温泉文化を核とした体験型ツーリズムのイベントである。各種のサービス産業は、別府の地域資源である温泉やまちなみ・自然等を活かしたプログラムを提供することにより、各々の発展と産業全体の活性化を図るとともに、参加者側は、提供されたプログラムに参加することで心身の充実を図る。特に観光旅行者には、参加・交流の体験のなかから別府の魅力を発見してもらうことで、リピーターや長期滞在者の増加につながることが期待されている。

春・秋の年2回、約1ヶ月の開催期間中、温泉、食、スポーツ、カルチャー、自然体験、ヒーリングなど150近くに及ぶプログラムを選択、体験することができ、最近では別府市内にとどまらず大分県内各地に足を運び、各地域のグルメや文化を楽しむプログラムも登場している。大分県内からの参加者が多いが、着実にリピーターも増加しており、別府の新たな観光形態として定着しつつあるといえる。

また、このオンパクの手法は、主催NPO法人が他地域に積極的にノウハウを伝授したことから、函館市「湯の川オンパク」、熱海市「オンたま（熱海温泉玉手箱）」、長崎市「さるく博」など全国各地でも取り入れられるようになり、またこれらを開催する他都市との連携も広がっている。

（３）別府アルゲリッチ音楽祭

（主催団体：財団法人アルゲリッチ芸術振興財団）

別府アルゲリッチ音楽祭は、世界的に有名なピアニスト マルタ・アルゲリッチ氏を総監督に迎えて開催される国際音楽祭で、今年で12回目を数える。アルゲリッチ氏と永年来の友人である別府市在住のピアニスト伊藤京子氏が1994年にコンサートで招聘した際、別府市の風景を気に入り、同年に完成したビーコンプラザ・フィルハーモニアホールの名誉音楽監督へ同市からの要請により就任したことが契機となった。それから4年後の国際音楽祭開催に向けて、毎年「別府アルゲリッチ・コンサート」を開催するなど、別府市民のクラシック音楽への理解を深める活動を地道に展開、これにより別府市民への認知や理解が深まり、1998年の第1回「別府アルゲリッチ音楽祭」開幕時より、多くの別府市民ボランティアが活躍することとなった。

同音楽祭は「育む」「アジア」「創造と発信」をテーマとし、世界のトップアーティストとアルゲリッチ氏のクリエイティブな共演を楽しむことができるだけでなく、毎年、アルゲリッチ氏本人を含めトップアーティストが若手演奏家や子供達に直接指導し、また若手演奏家がコンサート演奏に加わるなど、演奏技術のみならず音楽的創造性を育成する場となっている。また、アジア音楽文化の中核となるべくアジアの演奏家との交流も進んでいる。そして現在では、別府市民のみならず多くの県内外ボランティアが支える国際音楽祭として、別府市から世界に向けて音楽文化の魅力創造・発信すべく継続されている。

（４）別府における地域活性化の取り組みの整理

以上に紹介した、別府における地域活性化の取り組み事例においてもやはり、①地域関係者の参加・協働、②外部人材・資源の活用・交流、③地域資源の新たな視点からの活用 という共通要素を抽出できよう。

	地域関係者の参加・協働	外部人材・資源の活用・交流	地域資源の新たな視点からの活用
別府湯路地裏散歩	<ul style="list-style-type: none"> ・地元有志、経営者等の集まりから始まり、地域住民を対象とするツアーを通じて、別府の魅力地域を共有 	<ul style="list-style-type: none"> ・住民主体のツアーが拡大して、住民以外の参加者が増加 	<ul style="list-style-type: none"> ・別府の路地裏の猥雑な雰囲気・環境を地域資源としてポジティブに評価
別府湯泉泊覧会	<ul style="list-style-type: none"> ・地域住民主体のNPO活動として展開、市内に留まらず県内にもプログラム、参加者が拡大 	<ul style="list-style-type: none"> ・オンパクのノウハウを他地域に積極的に伝授することでネットワークを拡大 	<ul style="list-style-type: none"> ・温泉文化を核に、体験型ツーリズムのプログラムを考案・提供
別府アルゲリッチ音楽祭	<ul style="list-style-type: none"> ・市民のクラシック音楽への理解を深める活動を地道に展開し、多数の市民ボランティアが参加 	<ul style="list-style-type: none"> ・別府在住のピアニスト伊藤氏が世界的ピアニストのアルゲリッチ氏を招聘したことを契機に、同氏を総監督とする音楽祭が実現 	<ul style="list-style-type: none"> ・コンベンションセンター「ビーコンプラザ」を音楽祭の舞台として活用

【第4章】現代アートと別府市

以上に紹介したように、別府市では地域住民によるさまざまな芸術文化による地域活性化の活動が展開されているところであるが、昨年、新たに『別府現代芸術フェスティバル 2009「混浴温泉世界」』が開催され、現代アートという新たな切り口で地域活性化を促す仕掛けが試みられた。

(1) BEPPU PROJECT

「BEPPU PROJECT」は、山出淳也氏が2005年に立ち上げた芸術によるまちおこしのNPO法人であり、温泉や独特なまちなみ、歴史など別府の地域資源に、創造性あふれる現代アートをプラスすることで、新たなまちの魅力創出を模索している。発足以来、現代アートの紹介や人材育成、また別府市の中心市街地活性化プロジェクトの一環としてまちなかの古民家や空家をリノベーションし、地域の文化交流コミュニティプラザ「platform³」の整備事業を実施するなど、地域に根ざし、地域と芸術文化を結びつける活動を行ってきた。そして昨年、『別府現代芸術フェスティバル 2009「混浴温泉世界」』を開催、その後も別府を舞台とした現代アートイベントを主催するなど、現代アートの創造性に着目した事業を次々と仕掛けている。



文化交流コミュニティプラザ「platform04」

(2) 別府現代芸術フェスティバル 2009「混浴温泉世界」

① 概要

同フェスティバルは、大きく3つのカテゴリーに分類され、市内の各地で展示・開催された。メインは、世界的にも有名なアーティストらに別府のイメージに基づく作品制作を依頼し、フェスティバルのタイトルの所以でもあり、各地で展示される作品を別府のまちなみを回遊しながら鑑賞するアートクルーズにより、アートと別府のまち、温泉を一挙に体感するものであった。

また、古い木造アパートメントにアーティストが住み込み、同所で作品の制作・発表が行われた。そこには多くの若いアーティストたちが全国から集まり、レジデ

³ platform：別府市中心市街地に点在する遊休施設をリノベーション（改修）して文化交流施設に再生したもの。芸術家の作品展示・上映や滞在制作、パフォーマンス等の場として活用されている。

ンスアーティストとしてフェスティバル期間中、作品制作に取り組んだ。

そして「まちなかダンス」。別府のシンボルであり、住民の暮らしの場でもある温泉でのパフォーマンスや、日常の生活空間である商店街の通りのなかで、パフォーマー達が行き交う人々に入り交じり溶け込み創造的なダンスを繰り広げるなど、別府の温泉やまちなみを最大限に活かしたパフォーマンスが行われた。

② 効果と課題

「混浴温泉世界」は、メディアでも多く取り上げられ（BEPPU PROJECT 試算によれば、メディア露出を広告とみなして貨幣換算すると約 29 億円にのぼる）、とりわけNHKの日曜美術館での放映以降は一気に来場者が増加するなど、メディアの広告効果により新たな集客を生んだ。

また、イベントの内容についても、特に芸術関係者の間ではかなり高い評価を得られた。さらに、別府を訪れた多くの来場者がまちを回遊することで、現代アートとともに別府の文化的魅力を発見あるいは再確認することにつながったといえるのではないかな。

また、住み込みで作品制作を行ったレジデンスアーティスト達がフェスティバル閉幕後も別府にとどまり作品制作を継続したり、アーティスト同士の口コミで関東・関西からアーティスト達が別府を訪れ、制作に加わるといった新たな発展もみられた。

NPO 法人 BEPPU PROJECT によれば、当イベントの有料来場者による直接経済効果は 5 千万円程度と試算され、特にチケットであるパスポートは当初の販売目標を大幅に下回る結果となり、イベント全体でも財政的には厳しいものとなった。また地元住民の関心の低さ、交通体制等の問題、展示作品の説明不足などさまざまな課題も残された。現代アートに対する先入観の払拭も必要かもしれない。

しかしながら、メディアの露出度合いや芸術関係者をはじめ多くの来場者から得た高い評価等をもみても、作品のクオリティだけでなく現代アートが持つ創造性と別府の地域資源とが調和することでクリエイティブシティとして新たな別府の魅力を生み出す胎動を感じることはできたのではないだろうか。

そして上記の課題等も踏まえ、同フェスティバルのトリエンナーレ開催につなげる第一弾として、まちなかアートイベント「BEPPU PROJECT 2010 アート・ダンス・建築・まち」が今年 3 月に開催された。



マイケル・リン 作の巨大壁画 *恒久展示作品

(3) 「BEPPU PROJECT 2010 アート・ダンス・建築・まち」

① 概要

前述のとおり、このイベントは前年開催の『別府現代芸術フェスティバル 2009 「混浴温泉世界」』の次回開催を目指し、前回フェスティバルでの課題等を解決するために試みられたともいえる。

地域文化交流施設として整備された platform などの中心市街地をメイン会場に、アーティストが別府に滞在し作品制作を行い、また特に地域住民がアートに関わることを重視し、まちなかの魅力発見と住民参加型のアートイベントという位置づけで開催された。

タイトルにあるように、「アート」「ダンス」「建築」「まち」の4つのカテゴリーがあり、「アート」ではレジデンスアーティストが作品制作を行い、中心市街地に点在する platform に展示した。「ダンス」はアーケード内や老舗旅館など各所において開催され、1日5カ所での公演時間を調整し、参加者がそれぞれ次の公演場所に移動しながらまち歩きを楽しめる工夫がなされた。

「建物」では昨年閉店した県内唯一のストリップ劇場「A級別府劇場」をアーティストが芸術発信の場となる市民劇場としてリノベーションしていく過程そのものを提示する。通常の劇場とは異なる構造を最大限に活かし、2012年の完成まで市民とともに改修が進められていく。

そして「まち」については、当イベントのプロデューサーやディレクター自らがガイドしながら作品を巡るツアーを実施、現代アートを楽しみつつ、かつ別府中心市街地の路地裏散策をすることでまちの魅力を発見する企画として興味深いものであった。このほか九州沖縄エリアのアート関連のネットワーク構築を目的とした車座会議も初めて開催された。



2012年まで市民とともに改修が
すすめられる旧劇場

② 効果と課題

同イベントは、特に「住民参加型のアートイベント」というテーマについては、地域住民の意識変化の点において一定の効果をあげたといえる。

地域に根ざした住民参加という点では、地域コミュニティの文化交流施設「platform」を最大限に活用、同所ではアーティストと地域住民が交流したり、住民参加型の制作作品も展示された。また、中心アーケードの店内にアート作品を配置した結果、商店経営者も自ずと参加することとなり、現代アートに関心を持つな

ど、地域住民の意識変化につながったと感じる。現代アートへの馴染みの薄さからくる先入観についても、これらの交流に加えて、アーティスト自身が頻繁に開催したワークショップや、現代アートの魅力を伝えるために企画された主催者によるディレクターズツアーなどのプログラムが、現代アートへの理解を促す一助になり、現代アートを身近なものに感じるきっかけになったものと推測できる。

同イベントは、「大ボンダンス大会」というダンスイベントで閉幕したが、別府の風土や歴史をモチーフに創作された音頭「別府最適おんど」に合わせてお年寄りから子供まで約 200 名の参加者が一緒に踊り、ある種の一体感を創り出した。

そしてアート作品「どんなじごくへいくのかな」は、アーティストが別府の観光名所「地獄めぐり」から発想し、地元小学生による創作活動を展開したプロジェクトであり、学生の創造性発揮の場となった。地域の将来を担う子供達の、このような自由な発想力や芸術への興味が地域の文化力を押し上げ、自らのまちの文化・観光財産の再認識や、ひいては、このような現代芸術祭が自分たちの住むまちで開催されることへの誇りにつながり、地域への愛着を促進し、アイデンティティの確立に寄与していくのではないだろうか。



山本高之 作品「どんなじごくへいくのかな」

* 子供達の自由な発想が印象的だった

現代アートは、主催団体の地道な活動により少しずつではあるが地域住民に浸透しつつあるといえる。しかしながら、イベント開催期間中、まちなかでポスター掲示等の宣伝広告をほとんど見かけず、また、別府市の玄関口の一つである別府駅構内の観光インフォメーションセンターでも、案内係員が同イベントに即座に対応できる体制ではなかった。旅行者への開催告知や案内は、温泉だけではない別府の魅力を発信する絶好の機会である。PR活動、観光案内施設等との連携は今後の課題である。

【第5章】クリエイティブシティ別府に向けて

先述のように、別府市の場合、現代アートにおけるまちづくりの主体は、他都市事例のように自治体・経済界・スポンサー企業ではなく、市民を中心とする民間団体である。別府でのまちづくり活動は、その民間団体の積極的な活動により展開されている。

そして、『別府現代芸術フェスティバル 2009「混浴温泉世界」』やその後の現代アートイベント「BEPPU PROJECT 2010 アート・ダンス・建築・まち」は、クリエイティブシティに向けて一定の成果を上げたことはいままでのない。別府市がクリエイティブシティとして発展していくためには、このような定期的な現代アートイベントを地道に重ね、さまざまな問題点を見直しながら、その先に開催を目指す次の『別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」』に着実につなげ、これら現代アートによるまちづくりを継続していくことが重要である。

(1) 別府のポテンシャル

ここまで述べてきたように、別府における現代アートによる地域活性化の取り組みは、国内外における創造都市の潮流と軌を一にしたものである。

もちろん、それが先進事例の追随・模倣に止まるのであれば、別府として、かかる活動に取り組む必然性はない。それぞれの都市の歴史・文化に培われた個性を活かしてこそ、「クリエイティブシティ」の名に値しよう。

それでは、別府の個性・ポテンシャルとして、いかなる資源に着目すべきだろうか。別府市は、横浜市や金沢市ほどの経済規模は有していない。戦火を免れたとはいえ近年の開発によって多くの歴史的建築物が姿を消しており、或いは景観面でも近代的な街並みや古都の街並みを有する両都市に見劣りするかもしれない。一方で、越後妻有や直島のような里山・離島の自然景観も別府の中心部には存在していない。

こうした状況下で、別府として強調すべき資源は、やはり温泉観光都市として繁栄してきた歴史と文化であろう。

①温泉文化と現代アート

歴史的建築物は徐々に失われつつあるものの、古さと新しさがモザイク状に混在したまちなかは、猥雑で混沌とした雰囲気醸し出す。こうした風景こそ、他の都市・地域にはない別府の特色であり、場合によっては、美しい都市・自然景観以上に、そこに現代アートがずっと自然に入り込み、新たな化学反応を起こす可能性に富んでいるのではないだろうか。

また、現代アートが一部のマニアの趣味に留まることなく、広く市民に受容されるためには、現代アートが地域コミュニティといかなる接点を持つかが重要である。そうした観点からは、冒頭にも述べたように、別府市民が日常的に利用し、社交場

ともなっている温泉の存在は大きな鍵となるだろう。

江戸時代の湯屋（銭湯）は、単にお湯に浸かるだけではなく、入浴後に別室で休憩しながら囲碁将棋や談笑を楽しむことができたという。このように、公衆浴場は元来、地域コミュニティのサロンとしての機能を併せ持っていたが、そうした文化は現代の大都市ではほとんど失われている。しかしながら、市営温泉に地区公民館を併設する別府では未だに息づいているといえよう。そして温泉は、地域住民と国内外からの来訪者が無防備な裸になって出会う空間でもあり、「内」と「外」の異なる存在の間を、緩やかにそして温かくつなぐ機能をも有している。

実際、香川県の直島では、銭湯そのものを現代アート作品としてわざわざ制作している。この直島銭湯「I♥湯」は、芸術家の大竹伸郎氏が手がけたアート作品であると同時に、国内外から訪れる来訪者と島民の交流の場とするため、実際に入浴することができる銭湯として運営されている。

これに対して別府の場合、新たに銭湯を整備するまでもなく、市内には数多くの温泉が存在することは大きな強みである。別府で開かれた現代アートフェスティバルが「混浴温泉世界」と命名されたことにも窺えるように、別府における現代アートの振興を図るうえでは、温泉文化といかに結びつけるかが重要と考える。

②集客交流都市としての優位性

横浜市や金沢市に比べて都市の規模が小さいことを憂える必要はなかろう。横浜市が大都市であるといっても、全ての市民が創造都市の取り組みを意識し関わっているわけではない。むしろ、別府のような地方中小都市であればこそ、そこに住む人々は、まちなかで不意に現代アートに遭遇する可能性も高くなる。そうした出会いをきっかけに、市民の現代アートに対する理解を深め、やる気のあるコアの人材と、それを支える市民サポーターを輩出することができれば、クリエイティブシティとしての成長は十分可能であろう。

そもそも、越後妻有、直島の事例からも明らかのように、現代アートのサポーターや鑑賞者は、地域住民だけでなく域外からも多く集まる。そうした観点から、別府における交流人口の大きさは強みとなろう。

例えば、別府市「観光動態要覧」によれば、別府市の2008年宿泊客数は3,739千人／年、1日当たりにして10千人である。別府市人口127千人（05年）の約1割の交流人口が常時滞在していることになる。しかも、定住者と異なり彼らは、常に別府の名所、観光スポットを探し回っているのだ。ちなみに、人口3,580千人（05年）の横浜市の場合、宿泊客数は5,134千人／年、すなわち14千人／日（08年）に留まる。人口455千人（05年）の金沢市の宿泊客数は2,287千人／年、6千人／日（08年）に過ぎない。宿泊客数推計は自治体によって調査手法が異なるため単純な比較はできないが、別府の大きな特徴が交流人口の厚みにあることは間違いない。

また、別府のポテンシャルを考える際、県都大分との近接性も考慮すべきであろう。別府市を含む大分都市圏（10%通勤通学圏）の人口は737千人であり、金沢に

引けはとらない。クリエイティブシティの担い手は、市内のみではなく、大分都市圏、さらには大分県下に広く求めるべきである。

加えて、全国各地のクリエイティブシティが、海外の芸術家との交流を深め、海外からの誘客も行っていることを踏まえるに、別府に立命館アジア太平洋大学（APU）が立地している点は大きな利点として働きうる。市内でイベントを開催する際のサポーターとして、また、卒業後に海外や国内他地域に就職する場合でも、彼らを通じてクリエイティブシティ別府の名前が世界中に広がる効果が期待される。

このように、クリエイティブシティとして別府のまちが活性化する可能性は十分にある。

都市経済学者のR・フロリダは、成長都市の要因として、「才能（talent）」、「技術（technology）」に加えて、「寛容性（tolerance）」の3 Tを重視した（R・フロリダ著『クリエイティブ資本論』）。集客交流都市として多くの観光客を迎えてきた別府の土地柄には、余所者を温かく受け入れる「寛容性」があるはずである。

そして、一見したところは横浜市等の大都市に比すれば人口も少なく、文化施設インフラ整備等の点では恵まれた環境にあるといえない別府市には、類希な豊富な温泉という魅力的な地域資源を有する世界でも有数の温泉観光地であり、交流人口という強みがある。

温泉やその文化を中心とした地域資源にアーティストが現代アートによって新たな息吹を吹き込み、いままで何気なく見過ごされていたまちやその遺産が、過去の記憶を残したまま生き返る。地域資源と現代アートの融合により創出された新たなまちの魅力という付加価値が、別府市の観光都市としての再興、そして地域の活性化につながるのではなかろうか。

（２）クリエイティブシティ別府の実現に向けた提案

最後に、クリエイティブシティ別府の実現に向けて、今後求められる取り組みについて考察したい。

以下では、第2章の事例調査で抽出した3つのポイント、すなわち、①地域関係者の参加・協働、②外部人材・資源の活用・交流、③地域資源の新たな視点からの活用 に即して、取り組み方策について提案を行う。

【地域関係者の参加・協働】

① 地域住民の理解、協働

まちづくりにおいて地域住民の力は大きい。現代アートを身近に感じ、それを新たなまちの資源として地域住民が受容することが重要である。そのために時期に関わらず地域住民参加のワークショップやアーティストとの交流を頻繁に開催

すべきと考える。

地域住民に意識変化が起これば、まちの自信にもつながる。そして、より良いまちにしたいと自発的な活性化への努力につながり、地域にエネルギーが生まれるのではないかと。

② 別府市その他の文化イベントとの連携

別府八湯温泉泊覧会（オンパク）において、「別府と現代アートに関するプログラム」を設けるなど、別府市で開催されるその他の文化イベントと連携を図る。また、案内ボランティアの育成も課題となるが、別府八湯路地裏散歩の中に、常設展示作品を巡るツアーを組み込むなど、現代アートイベント開催時のみならず、別府の現代アートに触れる機会をつくってはどうか。

③ 行政等の支援

横浜市や金沢市等の例にもあるように、現代アートをまちづくりのビジョン、戦略の中に明快に位置づけ、能動的に取り組む姿勢が必要である。また、廃校など遊休化した公有資産等を、現代アートを通じた地域住民とアーティストのコミュニティの場また作品制作活動の場とするなどハード整備も重要であろう。

また、教育委員会や学校の協力を得て、別府市の小・中学生の現代アートイベントへの参加を促進、具体的にはイベント期間中、作品鑑賞ツアーや現代アートのワークショップへ授業として参加する。参加により現代アートに触れる機会を持つことで先入観払拭や芸術への興味へとつながり、ひいては地域の文化力向上も期待できる。また、現代アートとともに別府の魅力を再発見することで地域への誇り・愛着心の醸成にもつながろう。将来の別府を担うこれらの若者から将来のまちづくりの担い手が現れればベストである。

④ 有効な情報発信

イベント開催に際しては、メディアを活用した情報発信の影響が大きいことは明らかであり、メディアに対し継続的に積極的に情報を提供していくことは必要である。そのうえでマスメディア以外の、例えば、別府市に立地する企業や団体のウェブサイト上でのPR、ホテル・旅館等の玄関先、別府駅、フェリーターミナルなど別府市の玄関口といえる場所での統一かつ印象的なビジュアルPR、観光案内所での説明など広範囲に及ぶ情報発信により、旅行者の目を惹きつけることが重要である。

【外部人材・資源の活用・交流】

⑤ アーティストの定住促進

アーティストの立場からすれば、作品創作活動の場の確保は重要なポイントである。空店舗等の遊休建物等の有効利用による無期限の制作活動・展示の場の提供

や、宿泊環境の整備によりアーティストの定住を促進すべきである。ニューヨークのソーホー地区のように、アーティストが寄り集まってアートのまちを形成した例も多い。

⑥ 地域住民にとどまらず、県内外、国内外にサポーターをつくる

アルゲリッチ音楽祭において、芸術への共感から音楽祭ボランティアが県内外から参集するように、将来的にボランティアとして参加してくれるようなサポーターをつくることは重要である。また、別府には多くの外国人留学生が生活しており、ワークショップの開催等によりボランティアとして育成することで、海外来訪者への対応など、より広範囲な来場者へのサポートが可能になるのではないか。特に韓国や中国からの別府市への観光客は増加しており、新たな別府の魅力として海外に発信できるチャンスでもある。

【地域資源の新たな視点からの活用】

⑦ 別府の歴史や伝統に根ざした独自性の創出

別府の伝統工芸である竹工芸の洗練された技法、作品には、芸術的なものも多く、某高級ブランドが別府の伝統工芸士製作の竹製ポーチをニューヨーク 5 番街のショーウィンドウに飾っていたのは有名な話である。また、今年 4 月にニューヨークで開かれた国際的な美術品展覧会において別府の竹伝統工芸士が制作した現代オブジェが評価を受け、7 月には米国メトロポリタン美術館が作品を買い上げた。同美術館においても竹工芸の現代作品は初めてとのことであり、つまり別府の伝統的な竹工芸は、工芸品としての実用性、ファッション性の高さだけでなく、アート作品として現代アートの創造性も十分に持ち合わせているということであり、「竹工芸と現代アート」というアプローチは別府の独自性創出につながるのではなかろうか。

以上に列挙した点をふまえたうえで、現代アートを別府の新たな魅力と認識し、たとえば「別府＝温泉と文化と現代アートのまち」といった別府の将来ビジョンを官民が共有し、その実現に向けて行政、地域住民、企業・団体など、全ての人プレーヤーとして関わっていくことが必須である。

その先に、「クリエイティブシティ別府」という別府の新たな「顔」が見えてくることを期待したい。

《主な参考文献》

『創造的都市』 チャールズ・ランドリー 著

『クリエイティブ資本論』 リチャード・フロリダ 著

『創造都市への挑戦』、『創造都市と社会包摂』 佐々木雅幸 著

『アート戦略都市』 吉本光宏 著

『混浴温泉世界事業報告書』 別府現代フェスティバル2009 実行委員会 発行

『Beppu Project 2010 事業報告書』 NPO 法人 BEPPU PROJECT 発行

『大地の芸術祭 2009 報告書』 大地の芸術祭実行委員会 発行

※当レポートの内容、意見は筆者個人に属するものであり、(株)日本政策投資銀行の公式見解ではありません。

お問い合わせ：

株式会社日本政策投資銀行大分事務所 担当：佐野真紀子
〒870-0021 大分市府内町3丁目4番20号（大分恒和ビル）
Tel. 097-535-1411